

徳田教之著

『毛沢東主義の政治力学』

慶応通信 1977年 4+5+372ページ

I

歴史研究を志す評者からみると、本書はいわば歴史における「毛沢東主義」の形成と終焉とでもいうべき分析内容をもっている。換言すれば、毛沢東「神話」の形成過程・内容・崩壊過程がここでの研究対象であるが、それとともにさらにそれとおして今日の中国の政治構造と動向をも展望しようという意欲的な課題設定がなされているのである。このような課題を設定し本書を公刊するにいたった出発点は、著者自らの言葉をかりると、かのプロレタリア文化大革命以降、毛沢東の絶対的権威という「神話」に対して「重大な疑念」を感じたところにあるとされており(1ページ)、そこから本書の目標も、文革以前の中国共産党の「組織とイデオロギーに対する毛の凝集力(「毛沢東の権威の問題である」——4ページ——ともいいなおされている)の実態とは何であったのか」(1ページ)を問いなおす作業に重点がおかれることになる。このような目標設定からも推測されうるように、本書を一貫して流れているのは、毛沢東「神話」や絶対的権威への批判的精神であり、同時にそれらを無条件に中国研究や論壇に氾濫させてきた風潮への批判もしくは挑戦的姿勢であるが、そうした姿勢は著者の執拗なまでの実証性によって裏打ちされて一定の説得力が生じているところに本書の価値があるように思われる。

II

次に本書の概要を紹介しておこう。本書の構成は次のようである。

第一部 毛沢東主義の形成 1935～1945年

はじめに

第1章 分析の枠組

第2章 ひとりの指導者の出現まで

第3章 毛沢東のリーダーシップの漸次的成長

第4章 超越的権威への前進の加速化

第5章 カリスマ的指導への「大突進」としての整風運動

第6章 党史の改訂——神話の創造

第7章 毛沢東の思想の凝集力——むすびに代えて
第二部 社会主義への転換と毛沢東主義 1953～1956年

第8章 高崗・饒漱石肅清の政治力学

第9章 社会主義戦略としての毛沢東主義の起源
——1955～1956年の時期を中心として

第三部 現代中国の政治展望を求めて

第10章 中華人民共和国の政治概観

第11章 政治指導の動態をどう捉えるか

第12章 文化大革命以後の中国の政治状況

第13章 新憲法と毛沢東の指導権

第14章 毛沢東の内なるスターリン

第15章 中ソ対立と社会主義国家像の混迷
エピローグ 毛沢東以後を見つめながら

以上にみられるように、本書の構成は30年代以降の全時期(40年代後半を除く)をほぼカバーするスケールの大きなものになっている。

第一部 第1章では本書の方法論が提示されている。ここではほぼ三つの枠組が提示されている。第1は毛沢東の党に対する「凝集力」であり、第2にこれと不可分の関係にある“権威”の問題であり、第3に「より分析的には権威形成の戦略、環境など指導者の新しい状況との対応関係というより広い政治社会の力学的な文脈」(以上、4～6ページ)である。これらはいずれも欧米政治学の成果を中国研究に導入するという姿勢のもとで設定されたものであるが、著者はこうした分析の枠組を補助的手段の範囲にとどめ、「中国の革命運動それ自体の政治力学の中から、毛沢東のカリスマ的指導への抬頭の文脈を、分析的に構成しなければならない」(6ページ)としているように、必ずしも方法論としては著者独自の最終的結論を明示しているようには思われぬ。

さて第一部全体は、方法論にいう「動態的過程的」に「権威の形成」が論述されている(遵義会議から40年代前半の延安整風運動まで)。そこでのキー・ポイントとして、単に説明的・解釈学的ではなく、著者のいう「政治社会の力学的文脈」が立体的に解明されるよう努力されていることがよく分かる。著者によれば、毛沢東の権威の形成過程は、遵義会議での「限定的勝利」、37年までの間の「権威の原始的蓄積」(「権力を権威へと転換させる努力を開始した時期」と同意であろうか)が「基本的に完了した」時期(44～47ページ)、六中全会から整風運動にいたる間の「超越的権威への前進の加速化」の時期(「原始的蓄積」期との相違を著者は「毛が真の超越

的指導者へ向かって離陸するためには、別の党内闘争の論理と政治的圧力が必要であったのである。これ以後現われるのは、中共のイデオロギー活動の特殊化への主張と、毛沢東の留ソ派からの漸次的離脱と、かれらに対する潜在的批判の開始であった」——58ページ——と説明している)、1943年を頂点とする「カリスマ的指導」の確立期としての延安整風運動、というほぼ四つの段階に区分されている。そして最後に45年の七全大会に至る間に「党史の検討を経て仕上げられた“毛沢東思想”という言葉で呼ばれるようになった“一つの教義”……は、毛自身の思想そのものではないより大きな内容を含んだ公式のイデオロギーとなった」(114ページ)ことにより「党の神話」(同)ができあがり、毛沢東の「超越的権威」なるものが完成することになったとされている。ところで著者は正当にも「毛沢東自身の思想と、毛の同僚たちの思想との相互関係」について自問し、「相互に強い連帯感を形成しながらも、微妙なイデオロギー上での多様性が許容されていたということ」「達成された毛のカリスマ的指導は、最高指導者たちの間での民主的で友好的な人間関係を基礎として、機能していた」(125~126ページ)と自答しているが、実はこの点にこそ、文革期において分裂し崩壊する「毛沢東思想」とその「神話」の運命的原因があったことを著者は示唆したかったように思われる。

以上、第一部の骨格だけを紹介した。第二部ではこれを前提におきつつも、「より広い政治社会の力学的な文脈」の検討に、政治思想史的検討よりも政策論争の分析に、より主眼が置かれているので、第一部の叙述とはいささか様相が変わる。このうち第八章は「建国後最初に発生した重大な最高指導部内における権力闘争」(132ページ)としての高崗・饒漱石事件の原因と事件そのものもつ意味を検討したものである。この事件の結果として著者は「五中全会における新指導部の成立は、1952年末から始まる集権化過程の最後の仕上げであり、地方の割拠的勢力に対する党中央の勝利を意味した」(164ページ)と結論し、同時にその「集権化」の過程で「肥大化した“中央”の内部での分権化もまた発生せざるをえなかった」(165ページ)として、それ以後の中国政治に内包される複雑な権力闘争の発生要因をも展望している。

第9章はいわばその具体的な実証ともいべきものであるが、本書の論理構造からいえば要の部分となしているといっても差し支えないように思われる。すなわち第一部で論証された、毛沢東の中共における権威の確立

が、建国後の社会主義建設運動の「その出発点から、支配エリート内部における“葛藤”を、構造的に内包」(175ページ)しつつ(第8章で論証されたように)、いっそう強固なものに発展していったかにみえたその時に、まさに上記二つの点(または過程)がもつ特質によって分解しはじめること、つまり「毛沢東の建設戦略」(230ページ)と「毛沢東思想」の権威にこめられた多元的多面的なイデオロギーおよびそれらの体現者としての毛以外の指導者たちの政策との乖離がみられることが論証されている。それは農業合作化運動の過程における毛の「農村的社会主義とでも呼びうるビジョン」(190ページ)の形成過程と、それを促進するスターリン批判の衝撃へのうけとめ方を通して明瞭になりつつあり、八全大会では「圧倒的な政治的潮流への妥協と同時に、真実の是認」(232ページ、傍点筆者)によって一時的に糊塗されはしたが、「1958年春における」「毛沢東主義の再生と発展」「その正当性の樹立」(232ページ)をとおして、再び明瞭になっていくであろうことが、暗示的に提示されて第二部が書きおえられている。

第三部はこの暗示的に述べられた著者の展望が、文革とそれ以後の政治動向の実態にどのように現実化しているかを実証しようとしたものといえる。いわば著者の現代中国論であるが、第一・二部と大いに様変わりしていて、実証性がかなり稀薄化した印象批判めいた部分もある。しかし単なる印象論述ではなく、歴史的分析の積み上げの上にならって著者としてはそれなりの自信をもって書かれており、第一・二部から通読すればある程度説得力をもった論述になっているといえる。惜しむらくは第二部の末尾に暗示されている八全大会以降の政治動向および「毛沢東主義の再生と発展」以降の文革への展開過程が十分実証的でないために、文革とそれ以降の政治動向への切りこみ方にいささかの不満(第一・二部ほどの読みごたえ、説得性などの弱さという意味での)は残るが、そのような点をぬきにしていえば、著者が結論的に、「四人組」事件後の事態を「批判の論理の自己矛盾」(360ページ、他の表現では「いわば毛沢東の名と“毛沢東思想”の言葉による、毛沢東の思想の最後の継承者たちへの断罪である」——356ページ——とされている)、「毛沢東批判なき非毛沢東化」(363ページ)といった形で述べている主張には、評者も同感である。

III

結論部分およびそこにいたる歴史的研究(「神話」の形

成)の成果に基本的には同感と讃嘆の念を惜しまないながらも、最後に若干の評者なりの問題点を指摘しておきたい。要約的にいえば、それは著者のいう「毛沢東主義」なる言葉の概念規定およびその論証方法論についてである。「毛沢東主義」という用語について、著者によれば、「中国語としての“毛沢東思想”という言葉は、社会科学上の用語としては実質的には“毛沢東主義”と同義語であると解されるべきであろう。“毛沢東主義”があるか否かは、マルクス・レーニン主義のイデオロギー解釈と修辞学にとっては重要な問題ではあるが、政治分析にとつては、必ずしも困難な理論問題ではない」(115ページ)とされ、またとくに建国後では「中国を支配する一つの“統合的神話”としての毛沢東に代表される社会主義建設についての党の指導理念をさすが、毛沢東を中心とした中国共産党の指導権の構造を意味してきた」(173ページ)ともされている。ここでは、著者自身がいみじくも「われわれがしばしば安易に“毛沢東主義”とか“毛沢東(主義)体制”とよぶ場合」(173ページ)と記しているように、この言葉は著者自身にとっては執拗に説明するまでもない自明のものとして、「安易に」使われている面があるように思われる。他方、毛沢東自身の説明によれば、彼が党内において定着させることに熱意をもっていた毛沢東主義とは、「マルクス主義の一般的真理を中国革命の具体的実践と結びつけたものである」という意味での中国化されたマルクス主義」ということになる(王明への説明による。『王明回想録—中国共産党と毛沢東—』高田爾郎・浅野雄三訳 経済往来社 1976年25ページ)。王明に従えば、まさにこの言葉を使うか使わないかということ、少なくとも延安期の毛沢東の党内外における権威の確立をめぐる激しい闘争の焦点、もしくは帰結点であったわけで、「安易に」使われえなかった理由もここにあったと思われる。「イデオロギー解釈と修辞学にとって」のみ「重要な問題」であったのではない。もしそうだとすれば、この言葉の概念規定とその普及または敷衍をめぐるこそ、当時の権力闘争、著者流にえば権威とリーダーシップの結合の問題が端的に現出していたといわねばならない。ところが著者においては、建国後の概念規定と建国前のそれとの明確な対比のないまま、建国後の概念規定を尺度に建国前を測ろうとしているようにみえるのである。先に引用したような建国後の著者の概念規定には、評者にも基本的に同意する。それだからこそいっそう、歴史的経過に照らして、「毛沢東主義」の歴史段階的概念規定の厳密さを要求す

るのであるし、またそれこそ本書の主題たる毛沢東の権威とリーダーシップの質的・段階的發展もしくは構造的特質の変化過程の証しでもあったはずなのである。

評者は、本書の重要な成果の一つとして、内外に氾濫する歴史に対する演繹法的解釈(今日の尺度で過去を解釈したり歴史を書き換える)への批判的態度・方法論を高く評価したい。だとすれば、歴史における連続性と不連続性の問題はそれとして明確に規定した上で、何が残された問題なのかを具体的に明示してほしいと考える。「毛沢東主義」の問題に即していえば、毛の執拗な熱意にもかかわらず、なぜ延安時期にはこの言葉が敷衍しなかったのか、にもかかわらず実態としてはまさに著者のいうとおり毛の要求していたことと「実質的に」かわらない概念としての「毛沢東思想」が定着したのかといった点を明確にしておいてほしかったと思う。

これはある意味では著者の歴史の飛びこえ的解釈であるともいえるかもしれない。この点は、本書の分析対象から40年代後半のいわゆる人民解放戦争期(「第三次国内革命戦争期」)が欠落していること、あるいは少なくともこの時期の毛沢東の権威の問題をどうみるかという点についての言及がないこととも関連があるかもしれない。おそらく今日までの中共党史研究の水準からいえばこの時期の研究が最も遅れているといえ、著者が依拠すべき有力な研究がなかったことが、本書の不連続的研究たらざるをえなかった最大の理由であるかもしれない。しかしにもかかわらず、七全大会前後(1945年)から50年代初頭の高崗・饒漱石事件へと問題を短絡させることは、緻密な本書の研究姿勢からみると疑問なしとしない。第1に、この時期をはさんで決定的に異なる政治状況は中共が執政の党となったかなっていないかということ、したがって第2は、七全大会当時の毛の権威というものが一般には連続的に一貫して建国後も継承、貫徹されているかのように印象づけられるが、はたしてそうなのかということ(本書も結果的にはそううけとめていることは前述のとおりである)、第3により具体的には、本書で説明された50年代初頭の政治事件、すなわち「権力の集中化と地方勢力の再編成過程の摩擦」(138ページ)なるものの歴史的背景がまさにこの時期にあること、したがって第2の問題の解明にあたってはやはりこの時期へのなんらかの考察が不可分の課題とならざるをえないということ、などである。

要するに、今日いぜんとして「セクト主義・地方主義・お山の大将主義・独立王国」などといわれる政・軍にお

けるある種の特異な中国の状況ともいべき事態の残存の最後の歴史的根拠はこの時期にあるのであって、七全大会で確立された毛沢東の権威・リーダーシップといえどもこれを克服することができなかったという事実は、「毛沢東主義」の歴史的発展過程の検証においても重要な意味をもちはしないかということである。

「歴史の飛びこえ的解釈」または演繹的解釈とはこうした意味であるが、実はこの点は「毛沢東主義」の概念規定を含む著者の方法論とも結びついているように思われる。

著者の方法論については先に三つの枠組(プラスαといった方がより正確だろう)があることを指摘しておいた。ここでの問題点は、まず第1に毛沢東の「凝集力」「権威」というものを政治力学上の権力闘争、上層指導部内の緊張関係の範囲内で検討することの可否が問われるべきだろう。「より広い政治社会の力学的文脈」(前述)の中で「権威」の形成過程を論ずると方法論的には提示しながら、本書では必ずしもこの点の分析が深められていないように思われる。それはとくに民衆の動員、いわゆる革命的熱情とか積極性といわれるものが中共党をおしてどのように運動へと組織化されるのか、そしてそのことが毛の権威の形成にとってどのような意味をもっていたのかといった点である。こうした点を著者が完全に忘れていたと指摘しているのではない。たとえば文革の分析において、「中共指導部内においても、底流としては行政的有効性を重視するグループと社会的動員を重視するグループの二つが存在」(287ページ)すると記しているように、著者は一貫してこの民衆動員＝「社会的動員」の意味に着目していたとさえいえる。しかしそれはあくまで「権威」形成という上層の政治力学の範囲内での一つの環境の問題、もっといえば利用されるべき発條の問題としてとりあげられているにすぎないように思われる。評者は他のところで、毛の権威の形成が国民的統合の象徴として、また絶対的裁定者(正義と不正義)の必要から、下層もしくは周辺の民衆や毛以外の指導者によって押しあげられていく道筋について論じたことがある。この観点は著者のいう「微妙なイデオロギー上での多様性の許容」(前述)という理解と重なるものであろう。しかし異なる点は、民衆自身およびその運動そのものを、政治力学上の上からの被指導対象としてとらえるか、そのもののエネルギーや革命的熱情をそのものとしてとらえるかという点にある。この点で著者の観点を大胆に提示しているのは「大衆路線」についての理解の仕

方であろう。著者はこの言葉を「中共の政治指導の原則」(273ページ)にとらえ、「理想的な大衆路線などというものは現実には存在せず……」(274ページ)と論断している。この指摘は建国後の政治指導の中で説かれているのであるが、かかる理解が建国前の理解にも適用されるであろうことは明らかである。換言すれば「毛沢東主義」の形成期にも崩壊期にも一貫して「大衆路線」は「現実には存在」しなかったというのである。これは先述した歴史の演繹的解釈のもう一つの表現である。評者の理解では、「毛沢東主義」の形成期には明らかに実態としての大衆の革命的積極性が存在し、「大衆路線」とは「中共の政治指導の原則」ではあるにしても、その民衆の革命への積極的参加を組織化し拡大すること、別言すれば大衆のたちあがりという既成事実の追認とその政策指導原理への導入によってはじめて体系化されたものになったということである。このような理解に基づくと、毛沢東の誤りは建国前後に、「毛沢東主義」形成期と崩壊期に一つの理念を共通のものとして現実政治に適用しようとしたという点にあることになり、それは著者のいう「批判の論理の自己矛盾」(前述)と同意になるのであるが、著者自身もまた段階的・歴史的にとらえていないために実態としての民衆運動そのものの歴史的な存在を軽視することになっているように思われる。

IV

以上、ごく簡単に本書の紹介と若干の注文を述べてみた。書評においては、あげ足取りのような細かな詮索よりも、研究史上での正確な位置づけこそ重要であると考えられる評者にとっては、これ以上微細な諸点についてたち入った議論を展開する余裕も能力もない。おそらく本書のより詳細な検討を行なうには、30年代から現在までをとおして十分な研究蓄積を果たしてきた人こそふさわしい。にもかかわらず評者があえてこの書評をひきうけたのは、方法や中国観の相違をこえて、著者が現代中国の謎の部分に大胆にメスをふるおうとする研究者としての真摯な実証的態度および歴史的に解明しようとするアプローチの仕方の類似性に共感し、ともども今後のよりいっそうの研究の発展を確認しておきたいためであった。その意味では、いくつかの問題点を指摘しておいたことも、本書の研究史上での価値をいささかでも減ずるためではなく、後発の己れに課する研究課題を確認しておくためでもあったことを付言しておきたい。

(中央大学教授 姫田光義)